人間関係研究（南山大学人間関係研究センター紀要）, 1, 198-204.

■　人間関係研究へのアプローチ

アイデンティティの行方

－心理学的、社会学的視点とエコサイコロジーのアプローチ－

川　浦　佐知子
（人文学部心理人間学科専任講師）

はじめに

Who am I?　私は何者なのか？　誰もが一度はするであろうそんな問いかけが、私の場合そのまま研究テーマとなってきた。“私”とは何かを問うアイデンティティの問題は、一般に心理学の領域において語られることが多いが、様々な領域で多角的に扱うことで個人的な“自己探求”の枠を超え、“自己”の社会的、歴史的側面を探る研究、ひいては人間存在の意味を探求する研究になりえる。ポストモダンと呼ばれる今の時代にアイデンティティの問題を包括的に問うことの意味を考察しつつ、ここでは非常に基本的で、個人的な問いかけから始まった私自身の研究が、どのような焦点を持ち、どのような変遷を経て現在に至ったのかについて述べてみようと思う。

１．心理学的視点から

“自己”を把握しようとする試みの底には、自分という存在を世に位置付け、生き方を模索する姿勢がある。私が最初にその手がかりを求めたフィールドは、臨床心理だった。フィリッツ・パールスによって創始されたゲシュタルト・セラピーを学び、そのトレーニングを受けることで、今、ここで起こっていることへの気づきの重要性や、その気づきによってもたらされる新たな選択肢の認知、そしてその選択肢の中から選ぶことに伴う責任についての理解を深めた。またそれと並行してエンカウンター・グループ体験を重ねることで、グループのダイナミックスがどのような効用を個々人の自己理解、自己成長にもたらすのかについて体験的に学んだ。

自己は固定したものではなく、変化、変容していくもの。しかし、そうした

自己変容がもたらされる時には、それまでの自己概念が大きく揺すぶられる。“自己”の再検討を問いかけるような体験。それはそれまでの体験を統合していた自分なりの“物語”の再構築を促す。カール・ロジャースが提唱するカウンセリングなど、所謂臨床の場で自己の体験を語ることは、そうした新しい“物語”を構築するプロセスの一環として見ることができるだろう。個々が自らの体験をもとに語るストーリー。そこに表われるテーマや、その底に流れる普遍性についての理解を深める上で、私が頼りにしたのはユング心理学だった。フロイトによって開拓された無意識の領域。それをユングはより豊かで有機的な洞察をもって扱った。私自身はゲシュタルト・セラピーの手法を用いて、無意識からのメッセージである夢とコンタクトをとりつつ、ユング的アプローチをもってその理解を深めようとした。夢について学ぶことで“気づき”の領域を広げ、それまで意識されていなかった自己を統合するということを試みたわけだ。無意識と意識の接点を見つめることで、“自己境界”というものの奥底を探っていたといえるかもしれない。

2．“社会的自己”の目覚め

ゲシュタルト・セラピーやロジャースのカウンセリングに代表されるように、人間性心理学は個々人が持つ意志、選択の自由といったものを強調する。しかしその一方、そうした個人の意志とは関係なく、社会的に定義づけをされる“自己”というものが存在する事実も否めない。ジェンダー、人種、階層、文化、宗教、歴史。カリフォルニアに留学をしたことで、私自身、そうしたものが個人の自己定義、自己理解に深く影響を与えるということを痛感した。違う文化圏に身を置くことで、それまであまり意識されなかった“自己”の社会的側面に気づくことになった。

スー族などネイティブ・アメリカンの人々の自己形成について調査、研究を行ったエリック・エリクソンは、民族全体の文化が苛まれている状況下では、個人が健全なアイデンティティを確立することが極めて困難であることを指摘する。スー族の場合、狩猟などを通して自然、土地と共に生きる生活様式やそれに伴う儀式、果ては民族独自の言語さえも長年にわたり政治的圧力によって否定され続けた。そのような民族的歴史を背負う人々、特に若者は、社会全体における自らの場所を見い出しきれず苦しむ。“自己”がその礎として拠り所とする文化的コンテクストの否定は、自己否定そのものに繋がりかねない。そこにマイノリティと呼ばれる人々の苦悩がある。一方、社会の構成員としてマジョリティでありえる人達は、自分たちのアイデンティティを支えているコンテクストを擁護したり、再検討したりする必要がない。その分、個人の権利、意志というものの力を信じて自己形成をすることが可能になる。

日本にいた時にはアイデンティティの底に宿るそうした力関係に比較的無知でいられた私だが、アメリカで様々な人種、文化、歴史的背景をもつ人々と接

するなか、自分の中の“当たり前”が様々な形で吟味されることになった。折しも90年代前半、アメリカでは日本企業の急激な進出や、日本の対米輸出超過に対する懸念が“ジャパン・バッシング”という形で表われ、メディアは時に“エコノミック・アニマル”というような形容詞をもって日本人を喩え、そうしたバッシングの傾向を煽っていた。そうした渦中、メディアによって形成された日本人のイメージや、それを取り巻く全体のムードといったものと無関係でいられない自分を感じた。「経済力を持つ日本人」、また「従順なアジア人女性」といったレッテルが自分に貼られる度に、“ステレオタイプ”というものの持つ威力を見せつけられた。

こうした体験、気づきがきっかけとなり、社会学的視点から“自己”理解を試みるようになった。その際、私が頼りにしたのは、社会心理学の一派であるシンボリック・インターアクショニストの視点、そしてエスニック・スタディ、女性学といった分野におけるアイデンティティ理論だった。シンボリック・インターアクショニストのアプローチは、個人がその自由意志をもってする自己定義（パーソナル•アイデンティティ）と、取り巻く社会によって定義される社会的自己（ソーシャル・アイデンティティ）が、どのようにニゴシエイトされるのかを理解する上で役に立つ。が、現実にはこの“個”と“社会”の攻めぎ合いは一筋縄にはいかず、様々なライフ・ステージを通して終ることなく繰り返されることになる。また、個人はジェンダー、人種、職業などにまつわる様々なアイデンティティを持って社会に参加しているので、そうしたアイデンティティ間に摩擦が生じる場合も多くある。

こんなことがあった。大学にあるアジア人を中心としたエイジアン・パシフィック・アイランダーズという学生の自主組織に参加し、活動を共にした。同じ頃、女性学を学ぶ有志が集うグループにも参加していた私は次第に奇妙なことに気づいた。エイジアン・パシフィック・アイランダーズでは、“アジア人”であるということが強調され、男女間に存在する力関係について触れられることはなく、また一方、女性学のグループでは“女性”であることが人種、文化の違いを越える、という大前提のもと、文化的違いを尊重した視点が積極的にジェンダー問題に向けられることはなかった。

“共通性”にもとづいた“数”を強調することでグループの政治力を増し、社会にその訴えを主張していこうとする動きを称して“アイデンティティ•ポリテックス”と呼ぶ。こうした動きは多々、個人が抱える幾つかのアイデンティティのうちの一つをマスター・アイデンティティとして自己の中心に据えることを要求する。アイデンティティ•ポリテックスが個人にもたらす弊害については、アフリカン・アメリカンとして人種差別と戦いつつ、女性に対する公平な対応を社会に求めるブラック・フェミニストや、ゲイ・コミュニティに属しつつ、女性問題に取り組むレズビアン・フェミニストらが早くからとりあげている。

幾つかのアイデンティティの間で揺れる個人は多角的な意識を持つことになり、それは他者を理解する上で大きなリソースとなり得るのだが、その一方、帰属感の混乱や自己統合に伴う葛藤を経験することになる。そうした混乱や葛藤にどう向き合い、どう対処するのか。自分自身が体験していた混乱の解決の糸口を見つけるためにも、私は異なる文化圏からアメリカに渡り生活する女性達にインタビューをし、その疑問に応えようとした。ドイツ、アイルランド、フィリピン、メキシコ、エルサルバドル、バルバドスなど世界各地からやってきた女性達からその体験を詳しく聴く機会を得、異文化に身を置くことによって生じるアイデンティティ・クライシスについてリサーチを行った。その結果、その混乱の深さには計り知れないものがあり、時に拭い去れない孤独感となって個人を襲うこと、それと同時に、異なる価値観を持った文化に触れることは、それまで気づかなかった可能性を自らの中に見出し、人生における選択肢を増やすチャンスにもなり得ることを理解、確認した。

自らが持つ幾つかの異なるアイデンティティを受容しつつ、場に応じて柔軟に対応していく。それは終りのない自己統合のプロセスを要求する。どれか一つを自らのマスター・アイデンティティとし、他の自己表現を抑圧するなら混乱を避けることはできるかもしれないが、そのためには非常に大きな精神的代価を払うことになる。こうした問題は社会的マイノリティだけに関わる問題ではない。アイデンティティにまつわるこのような問題は、個人がジェンダー、職業、家庭内の役割、年齢など、社会的枠組みによって一様に定義されずに、いかに充分にその生を生ききるためのチャンスや可能性を増やすことができるか、という問題につながっているように思う。

3．より包括的なアプローチを求めて

文化、習慣、言葉の違うアメリカという国に身を置いたことで私は、それまで意識せずにいた自分の内にある文化的枠組みや、判断を下したり行動したりする上で大前提にしていた価値観に気づくことになった。それはある種私を自由にしてくれたが、また混乱をももたらした。そうした混乱を紐解くために学んだエスニック・スタディやジェンダー・スタディは、“社会的自己”というものを分析、理解する上で役立ったが、問題解決そのものへとは導いてくれなかった。ジェンダー、人種、階級、宗教、文化などといった視点から個人の経験に光を当てることで見えてくるものは多くあるが、それに頼りすぎると“自己”は分裂したまま統合の日の目をみることはない。人間の体験の複雑さや、そういった体験によって形成される個人の“自己”というものをホリステックに捉えようとしたり、様々なアイデンティティの統合を試みようとするには別なアプローチが必要なように思えた。

そんな頃、友人とキャンプをする機会を得た。オレゴンとの州境に近いマウント・シャスタ。その山頂を間近に見上げるキャンプ地パンサー・ミドウでテ

ントを張り、人気の途絶えた夏の終りの静かな時間を楽しんだ。日中は忙しく駆け巡るリスや鳥などに出会いながらハイキングをしたり、湖で泳いだりして過ごし、夜は折からの満月に照らされて長い影を落とす木々の中に佇んでみたりした。そうした時間を過ごす中ぼんやりとではあるが、シャスタという山に抱かれている自分というものが感じられるようになってきた。“山”という存在から見れば、私の存在はリスや鳥といった小動物のそれとなんら変わりがない。このようなそれまでにはなかった新鮮な視点を得て、それまで人との接触の中で“どのように自分は見られているのか”ということにいかに多くのエネルギーを費やし、それに縛られてきたかに気づくこととなった。

マウント・シャスタで体験した開放感。それによって“自己”というものを人との関係性においてのみ捉え、人間にとって最も基本的である自然とのつながりを考慮してこなかった、それまでの自分の視点の限界をまざまざと見ることになった。

あまりにも人間中心の世界観において“自己”は、その他全てのものを背景にして存在する“点”であるかのように捉えられる。あるポストモダニストは、一様でない価値観、多様な視点が錯綜するポストモダンと呼ばれる時代において都市は“劇場”であり、アイデンティティは様々な役割を演じるための“マスク”である、とさえ言う。仮面を着けかえるように、その場その場に応じた様々な役割を担い分ける。ポストモダニストは確かにこのような現象を上手く説明、分析している。しかし、様々なアイデンティティを統合しようとする自己の葛藤や、個人の自由意志に関わらずその人を規定する社会的アイデンティティの存在、アイデンティティの問題の奥底にある人間の存在の意味を探る探求は、このようなポストモダニストの視野には入っていない。

グローバリゼーションが進む今日、価値観の多様化に伴う選択肢の増加に我々は揺れ、移動可能範囲の拡大の代償として帰属感の喪失、孤独に悩む。こうした状況下にあって私達はどう自分というものを見つめていくのか。混乱を避けるあまり、狭い枠の中に“自己”を押し込め、その中で自らのアイデンティティを問うならば、意味のある洞察は導かれない。そのことに気づかせてくれたのが、物理学者であり、コスモロジストであるブライアン・スウィムだった。古典文学に造詣の深いスウィムは、科学的発見に基づいた宇宙史を抒情詩のように語る。宇宙の始まりとされるビッグバンから、銀河、太陽系の誕生、地球とその生命体系の形成へと続く果てしない時空の広がり。その中に自らを位置付けようとする時、現代人である我々も、ホーマーやダンテらが描く自らの起源を求める旅、真の喜びを探求する旅を始める。“自然”、“地球”、あるいは“宇宙”という大きなコンテクストの中で“私は何者なのか”を問い、より壮大な物語の中で自己の存在を考える時、全てのものの間に遍く基本的つながりの深さ、そしてそのつながりの中に縫いこまれた自己とその存在意味が見えてくるように思う。

こうした経緯を経て、私の“アイデンティティ”を探る研究は、新しい局面を迎えることになった。ディープ・エコロジー、エコサイコロジー、エコフェミニズムといった比較的新しいフィールドからの視点を得て、現在はディープ・エコロジストであるアルネ・ネスの提唱する“エコロジカル・セルフ”という概念を通して、“自己”を自然との関係性の中において考察することを試みている。

これまでアイデンティティの研究を通して様々な視点や見解に出会ってきた。そのうちのどれも貢献するポイントが違い、どれか一つが“自己”というものを理解する上で絶対的な有効性を持っているわけではないように思う。大切なのはそういった様々な視点によってもたらされた人間理解をどう統合していくか、ということだろう。人と自然との間に存在する精神的つながりを考察し、宇宙全体の中で人類全体のアイデンティティを問う。それとともに“人間”あるいは“人類”という括りでは表現しきれない、“個”の体験の豊かさ、複雑さ、ユニークさをどう尊重していくのか。私自身は前述した“エコロジカル・セルフ”というコンセプトを、社会的、文化的、歴史的に構築された自己というものと引き合わせながら、この課題に取り組もうとしている。具体的にはインタビューをし、歴史的、文化的、社会的背景を尊重したナラティブの中で、個人が感じる自然とのつながりの体験を語ってもらうことでデータを収集し、その人の持つ自然観、世界観といったものを洗い出しながら自己像を考察することを試みている。

心理学的コンテクスト、社会学的コンテクスト、そしてエコロジカル、コスモロジカルなコンテクストにおいて“アイデンティティ”という概念を人々の実際の体験と照らし合わせながら研究してきた。そのための手法としてインタビューによるクオリテイティブ・リサーチをこれまで一貫して行ってきた。それは今後も変わらないように思う。聴き手と話し手の間に存在する対話的でダイナミックな関係。そういった場においてリサーチを行う者として操作的にならないようにすることは大切だ。しかしそれと同時に“永遠の彼岸に立つ観察者”としてではなく、“インタビュー”という互いに影響を与え合う関係を充分に意識し活用することのできるリサーチャーとして研究を重ねてゆきたいと思っている。

“アイデンティティ”という概念を考察しつつ、自らのアイデンティティを問う研究。それはある種、私にとってサイコ・スピリチュアルな旅でもある。“アイデンティティ”の行方を追ううち、図らずも様々な領域に足を踏み入れる事になった私だが、今後は個人、社会、エコロジカル、コスモロジカルといったレベルでの“自己”探求を通して得た洞察をどう統合していくかが課題であるように思う。

参考文献

Collins, H. P. (1991). Black feminist thought: Knowledge, consciousness, and the politics of empowerment. New York: Routledge.

Diamond, I., & Orenstein, F. G. (1990). Reweaving the world: The emergence of ecofeminism. San Francisco: Sierra Club Books

Erikson, H. E. (1968). Identity: Youth and crisis. New York: W. W. Norton & Company.

Harvey, D. (1989). The condition of postmodernity. Massachusetts: Basil Blackwell, Inc.

Hewitt, P. J. (1991). Self & society: A symbolic interactionist social psychology. (5th Ed.). Massachusetts: Allyn and Bacon.

Jung, G. C. (1961). Memories, dreams, & Reflections. New York: Vintage Book.

Perls, S. F. (1992). Gestalt therapy Verbatim. Utah: Real People Press.

Phelan, S. (1989). Identity politics: Lesbian feminism & the limits of c ommunity. Philadelphia: Temple University Press.

Polkinghorne, D. (1988). Narrative knowing and the human science. Albany, NY: State University of New York Press.

Roszak, T., Gomes, E. M., & Kanner, D. A. (Eds.). (1995). Ecopsychol ogy: Restoring the Earth, healing the mind. San Francisco: Sierra Club Books.

Seed, J., Macy, J., Fleming, P., & Naess, A. (Eds.). (1988). Thinking like a mountain: Toward a council of all beings. Philadelphia: New Society Publishers.

Swimme, B. (1996). The hidden heart of the cosmos: Humanity and the new story. New York: Orbis Books.